

## 家族政策と社会階層（後編）\*

——イギリスソルフォード市「プレストメイツ（Breastmates）」の  
実践から考える、オルターナティブな母乳育児支援の可能性——

村 田 泰 子\*\*

### 1 はじめに

本論文は、先に執筆した論文「家族政策と社会階層（前編）——イギリス Infant Feeding Survey にみる、授乳期家族に関する知識とその活用——」の後編である。

先の論文では、1970年代半ばのイギリスで、健康と社会保障省が人口センサス局に命じて Infant Feeding Survey と呼ばれる実態調査を開始した経緯をふり返ったうえで、最新版の Infant Feeding Survey の結果をもとに、今日なお、イギリスでは、社会集団ごとに母乳育児開始率や継続率に開きがある現状を確認した。すなわち、高学歴で専門的な職種に就き、社会経済的な不利益の小さい地域に居住する、30代以上の非白人の母親ほど母乳を多く与えており、学歴が低く就労経験がない、もしくはルーチンワークや単純作業に従事する、社会経済的な不利益の大きい地域に居住する10代の白人の母親ほど、母乳を与えていなかったのである（村田2017）。

このことは、現代イギリスの政治的文脈では、単なる差異（difference）の問題としてではなく、多面的不利益が積み重なった帰結としての、不平等（inequality）の問題として捉えられる。1990年代末に新労働党政権のもと、家族・母子保健分野の一大改革であるシュア・スタート計画が着手された背景には、まさにそうした不平等に対する問題意識があった。シュア・スタート計画の中核をなす「シュア・スタート地域プログラム（Sure

Start Local Programme : SSLP)」においては、4歳以下の貧困児が集中する地域250ヶ所にチルドレンズ・センターと呼ばれる拠点施設が建てられ、保健や教育、社会サービスなど多岐にわたる支援が提供されることとなった。2006-2007年度だけで、チルドレンズ・センター関連の予算として地方自治体に17億ポンドが交付されている（J. ベルスキーとJ. バーンズとE. メルシュ2013:30）。

わたしが調査を行ったソルフォード（Salford）市も、イギリスではよく知られた深刻な不利益地域である。シュア・スタート時代には、ソルフォード市だけで10ヶ所のチルドレンズ・センターが建てられ、支援が展開された。後述するように、ソルフォードは産業革命期にはマンチェスターとならんで繁栄を極めたが、20世紀以降は衰退が著しく、今日では口の悪いひとびとは、典型的な「下層白人（poor white）」の町と呼ぶほどである。子育てにおいても、10代の妊娠率の高さや母乳育児率の低さなど多くの課題を抱えている。そのような状況にあって、2006年にソルフォード市のチルドレンズ・センターで開始された母乳育児教室「プレストメイツ（Breastmates）」の実践は、人生のごく早期に始まる貧困や不平等の問題に対し、家族サービスの提供をつうじて解消を図るユニークな取り組みである。従来指摘されてきたように、貧困世帯に的を絞ったサービスにはスティグマがつきものだが（J. ベルスキーとJ. バーンズとE. メルシュ2013:5）、そのように特定の地域住民全員を対象にすることで、スティグマは回避できるのだろうか。また、ミドルクラ

\*キーワード：社会階層、フェミニズム、母乳育児支援

\*\*関西学院大学社会学部教授

スのライフスタイルや価値観により親和性が高いとされる母乳育児という営み (J. Wolf 2010) を、貧困世帯の母親や 10 代の母親にとってより受け入れやすいものとするため、現場においてどのような創意工夫がなされているのだろうか。教室の実際の利用者には、どのような人たちがいて、サービスはどのように利用されているのだろうか。以下では、2007 年 2 月から 2008 年 12 月にかけてと、2011 年 7 月に実施した現地調査で得られたデータをもとに、これらの問いについて考察していきたい。

なお、今回、そうした実践面での問いとともに、検討したいもう一つの問いがあった。それは、母乳育児あるいは母乳育児支援という文脈において、フェミニズムは科学といかに付き合っていくべきかという思弁的な問いである。

先行する諸研究が示すように、フェミニズムにとって、科学はつねに両義的な意味をもつ営みでありつづけた。科学は、女性の身体に生起するさまざまなトラブル——とりわけ妊娠や出産にまつわるトラブル——を解決してくれる「福音」として近代に登場したが、その一方で、科学の実践そのものをつうじて、女性の身体が男性の身体とは明確に異なる「自然の法則」を持つ身体として、構築されてきた側面があったからである (H. ヒラータと F. ラボリと E. ル=ドアレと D. スノティエ 2002 : 32-33)。

母乳育児や母乳育児支援という文脈においても、フェミニズムと科学のかかわりはつねに緊張関係を孕むものでありつづけた。19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、黎明期の小児科医たちは乳児死亡率との関連から乳児栄養の問題に関心を寄せ、人工栄養児と母乳栄養児の比較や乳児の栄養生理の解明に力を注ぐようになった (Wolf 2011、村田・伏見 2016)。やがて 1970 年代に入ると、先進工業諸国を中心に展開されたグローバルな母乳推進運動をつうじて、母乳は単に文化的に望ましいだけでなく、乳児の発達や健康にとって「比類なき優位性」をもつものとして再定義された。そうした動きのなかで、女性のケアの役割をふたたび自然化して語る事が可能になっているのである。

こうした懸念を共有するフェミニストたちは、

科学主義の母乳言説に対し、すでに広範な批判を行ってきた。それをもっとも熱心に、徹底的に行っているのは、アメリカの研究者、Joan Wolf である。Wolf は *Is Breast Best?* (母乳が最善か?) と題された著作のなかで、「科学——母乳育児はより賢く、よりハッピーで、より健康な子どもを作るのか?」という章を設け、つぎのような議論を行っている。Wolf によれば、現代の母乳言説を牽引してきたのは、1997 年にアメリカ小児科学会によって出された「乳児の授乳において、人乳 (human milk) は比類なく優れたもの (uniquely superior) である」(Wolf 2011 : 21) という宣言である。以来、科学者たちは、「ぜんそくからアレルギー、おねしょ、各種小児がん、循環器系疾患、腹腔疾患、児童虐待、糖尿病、下痢、湿疹、成長痛、白血病、壊死性腸炎、炎症性の腸疾患、知能、母子の絆、肥満、中耳炎、新生児後死亡、未熟児の健康、呼吸器系感染症、睡眠時の呼吸障害、社会移動、立体視力、ストレス、新生児突然死症候群、尿路感染症」(Wolf 2011 : 22) にいたるまで、広く乳児の身体的・精神的・社会的・情緒的健康にまつわる利点について研究を行ってきた。Wolf がアメリカの医学系の論文データベース PubMed を用いて調べたところ、タイトルまたは要旨に *breastfeeding* または *breast-feeding* という語を含む論文は、2009 年だけでじつに 1,155 本も発表されていたそうである (Wolf 2011 : 22)。

Wolf はそれらの論文のなかから、科学系ジャーナルならびにポピュラー言説において高頻度に引用された論文を対象に詳細な検討を行い、研究のデザインから結果の考察にいたるまで、方法論上ならびに解釈上の問題を持つものが多数見出されたと指摘している。すなわち、多くの論文で、相関関係でしかないものが誤って因果関係と解釈されている。また、ごく一部の感染症 (胃腸部の感染症) を除いては、母乳育児が乳児のよりよい健康をもたらすメカニズムは論証されていない (Wolf 2011 : 22)。また Wolf は、母乳育児の利点とされるものの多くは、母乳育児そのものではなく、より広い意味での親の養育態度や行動——手洗いなど衛生にかかわるしつけや、乳児期からの本の読み聞かせや語りかけといった、ミドルクラ

スの親に広くみられる養育態度——の帰結に過ぎないという指摘も行っている (Wolf 2011: 43-45)。

このように科学と正面から対決する作業は、フェミニズムの仕事として非常に意味があるし、インパクトもある。ただしまた、本論文でわたしがこころみたいのは、それとは別の作業である。本論文では、科学と対決する代わりに、科学と折り合いをつけつつ、付き合っていく方法について考えてみたい。というのも、「母乳の比類なき優位性」をめぐる科学的言説はすでに社会に広く浸透しており、現状において多くの女性が、母乳で育てることを望んでいるからである。厚生労働省の「平成27年度 乳幼児栄養調査」でも、0歳から2歳の子どもを持つ女性の9割以上が、妊娠中は「ぜひ母乳で」あるいは「できれば母乳で」育てたいと考えていたと答えている。にもかかわらず、生後3ヶ月の時点で、母乳のみで育てている割合は全体の4割弱にまで減少する<sup>1)</sup>。また、日本では、早期に離乳した女性の多くが、自身の哺乳経験を否定的なものとして捉えているという指摘もある (Negayama, Norimatsu, Barrat and Bouville 2012)。

このように日本社会で多くの女性が母乳育児を抑圧的なものとして経験している背景には、旧来的な支援実践において、母乳育児が厳しい食事制限や「手作り」の食事、あるいは禁酒、禁外出、禁就労、禁おしゃれといった禁欲的生活とセットで語られてきたこと、また、1年以上の長期で、しかも完全に母乳だけで育てなければ母乳育児と認めないといった風潮が保持されてきたことと無関係ではないのではないだろうか (村田 2017)。近年日本でも、若い世代の助産師を中心に、そうした旧来的な支援のあり方を見直し、女性にとってより抑圧的でないかたちで支援を行っていかうとする動きが広がっている。本論文ではそうしたひとつひとつとともに、母乳育児という前提を受け入れつつ、かつ女性にとってより抑圧的でないやり方で支援していく可能性について考えたい。

なお、本論文で使用するデータが、やや古い点について断っておく必要がある。シュア・スタート計画はもともと10年間の計画で開始され、計画そのものはすでに終了している。ただし、2010年の政権交代にともない大幅な予算削減がなされたのちも、シュア・スタート・チルドレンズ・センターは「チルドレンズ・センター」と名称を変え、今日なお、イギリスにおける児童・家庭支援の永続的な制度でありつづけている。そこで行われていた母乳育児を基軸とする包括的 (inclusive) な家庭支援の取り組みは、未だ日本には存在しないものである。以上の理由から、今日敢えてその実践を取り上げることには意味があると言えよう。

## 2 ソルフォードの概要

### 2-1 産業革命期ソルフォードにおける労働者階級の家族と子育て

はじめに、調査を行ったソルフォード市の家族と子育ての状況について歴史的概況を説明しておきたい。

ソルフォードは、イギリス北西部ランカシャー地方の都市カウンティ、グレーター・マンチェスターに位置する都市である。歴史的にみて、東に隣接するマンチェスターとともに、18世紀から19世紀にかけて産業革命の中心地となったことで知られている。かのフリードリヒ・エンゲルスも、『イギリスにおける労働者階級の状態』を執筆するに当たり、ソルフォードにも足を伸ばしたようで、「ソルフォードは以前はマンチェスターよりも重要な町」(エンゲルス 2000: 104)であったと述べられている。とりわけ19世紀のソルフォードの成長ぶりは凄まじく、1812年にはわずか1万2,000人だった人口が、19世紀末には22万人にふくれ上がった市内には7つの巨大な綿紡績工場があり、多くの労働者が暮らしていたという<sup>2)</sup>。

ソルフォードの労働大衆の生活は、ひとことで

1) 厚生労働省 HP「平成27年度 乳幼児栄養調査結果の概要 第1部 乳幼児の栄養方法や食事に関する概況」(<http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000134207.pdf> 2018年6月24日取得)。

2) ‘History of Salford’, Salford City Council



図1 ソルフォード市のロケーション (丸で囲まれた、色付けされた部分)<sup>3)</sup>

言えは苦しい生活であった。エンゲルスはソルフォードの労働者の住居について、つぎのように書き記している。「路地を歩きまわり、あけっぱなしのドアや窓から地下室や屋内をのぞいてみるなら、ソールフォードの労働者が清潔さや快適さなどはまったく不可能な住宅に住んでいることが、一目でわかる」。「労働者住宅はその不潔さと住民のつめこみぶりにおいて、マンチェスターの旧市街にまさるとも劣らない」(エンゲルス 2000: 105)。

また、*Manchester...The Sinister Side* (1997) と題されたフォト・ブックには、「ソルフォードの下層生活 (SALFORD LOW LIFE)」と題して、19世紀末の労働者階級の家族の困窮ぶりについて、つぎのように記されている。ソルフォードに住むジョー・トゥールという男性は、週19シリングの給料で11ヶ月の赤ちゃんを養っていた。毎週土曜日の夜に給料が届くや否や、つぎつぎと取り立て人がやってくる。まず、家主が週の家賃6シリングを、つづいて子どもが生まれた家族に課される積み立て金と燃料用のくず木材のための積み立て金、最後に家族全員分の衣服の配給代2シリングが取り立てられると、手元にはほとんど残らなかった (Jones 1997: 5-6)。

そのように経済的に困窮した状況にあって、子どもたちの生命も危機にさらされていた。ソルフォードの地方紙、ソルフォード・ウィークリー・ニュースには、病院勤務の薬剤師が語った、つぎのような話が掲載されている。1868年の記事である。

工場労働者たちは非常に若くして結婚する。女性の手でも男性とほぼ同じだけ稼ぐことができるため、子どもはしばしば合法または非合法に、なるだけ多くの子どもを預かろうとする高齢の女性のもとに預けられる。子守り代の相場は週に18ペンスから3シリングと、開きがあるようである。

このようにして預けられた乳児が、慢性的な下痢や腸間膜の疾患からくる萎縮のため病院にかつぎ込まれるケースはあとを絶たない。子どもの世話をしている女性のなかには、自堕落な生活をしており、そのことを恥じてさえいない者もいる。あるいは自分自身、第二の子ども期に突入しているような、高齢で衰弱した女性もいる。子どもが病院にかつぎ込まれてくるのは、たいてい死を目前にして、医師の証明書が必要になってからであり、小さな不調のために病院に連れてこられることはめったにない。

子どもの病気はほぼすべてのケースにおいて、不適切な食事に原因を求めることができる。食事の量が十分でない場合もあれば、「静かにさせるための物質 (quieting stuff)」が原因のこともあった。生後2、3ヶ月の乳児が、ベイビー・ファーマー<sup>4)</sup>自身が口にする粗悪な食事とほとんど変わらないものを与えられるケースもあれば、パンと水、じゃがいもととともに、(静かにさせる目的で) ざらめ砂糖に浸したモスリンの布切れを与えられる、より悪質なケースもあった (Jones 1997: 57)。

↘ (<http://www.salfordcommunityleisure.co.uk/culture/salford-museum-and-art-gallery/local-history/history-salford> 2018年6月9日取得)。

3) 'Locate in Salford', Salford City Council

(<http://www.visitsalford.info/locate/location.htm> 2018年6月9日取得)。

4) 「ベイビー・ファーマー (baby farmer)」とは、子どもの預かりで生計を立てる高齢女性を指す蔑称である。

あるいは20世紀初頭、ソルフォードで子ども時代を送ったエミリー・グレンクロスという女性は、*Memories of a Salford Childhood 1914-1928* (1983) と題された自叙伝のなかで、当時の生活についてつぎのように書き記している。グレンクロス家は両親と2人の姉、1人の兄、著者の6人家族で、父親はカートに積んだ石炭を馬に引かせて運ぶ仕事をしていた。父親は夜遅くに仕事を終えるとパブに直行して酒を飲み、家には子どもたちに食べさせるためのお金さえ入れなかった (Glencross 1983 : 1-3)。

母親は13歳から紡績工場で働いていたが、一人目の子どもを身ごもって仕事を辞めた。その後も相次ぐ妊娠・出産のため、しばらくは働いていなかったが、著者が2歳半になったとき、働きに出ることにした。近くで仕事が見つからなかったため、クロス・レーン駅から電車に乗って通うことになった。母親は朝6時からの仕事に間に合うよう、毎朝4時半に幼い著者を木製の手押し車に乗せて、祖母の家に預けに行った。ある冬の朝、警察に止められ尋問されてからは、著者は終日、祖母の家に預けられることになった。土曜の夜には姉たちが迎えに来てくれ、また日曜日の夜には祖母の家に戻る生活だった。祖母の家には祖父と未婚の叔父叔母(母の年下のきょうだいたち)が暮らしており、著者は屋根裏部屋で二人の叔母と眠った (Glencross 1983 : 5)。

以上、限られた資料をもとにはあるが、19世紀末から20世紀初頭にかけてのソルフォードにおける労働者階級の家族と子育てについて見てきた。大人の生活が困窮をきわめるなか、子どもの食事や健康に注意を払う余裕などなかったことが見てとれる。

## 2-2 現代ソルフォードの家族と子育て

つづいて、現代ソルフォードの家族と子育てについて概観しておきたい。現代ソルフォードはもはや、産業革命期のような「都市スラム」ではない。しかし、お隣のマンチェスターがビジネスや

金融、観光、学術、スポーツといった分野で成功を収め、今日リバプールとならぶ北部の中心地と称されるのに対し、ソルフォードは今なお、かつてのイメージを完全には拭いきれていない。

ソルフォードと聞いて多くのイギリス人が思い浮かべるのは、1960年に放映が開始された大衆向けの連続テレビドラマ、「コロネーション・ストリート (Coronation Street)」である。ソルフォードにある架空の町「ウェザー・フィールド」を舞台に展開されるこのドラマは、恋愛や結婚、離婚、親子関係のトラブル、飲酒や薬物問題など、いわゆる「庶民の日常」を描き、人気を博している<sup>5)</sup>。

むしろ、それはドラマのなかの話であり、現実のひとつの生活と同一視されるべきではない。ここではソルフォード市の「公衆衛生のパフォーマンス報告書 (Public Health Performance Report)<sup>6)</sup>」をもとに、現代ソルフォードの家族と人口、子育ての概況を確認しておきたい。なお、データは、調査を実施した2007年時点のものである。

## 死亡

まず、死亡にかかわるデータについて、ソルフォード住民の平均寿命は、男性が73.8歳、女性が78.4歳である。これは、政府が定めるがんや循環器系疾病死亡の数値目標を、それぞれ3.1歳と2.7歳、下回っている。

また、乳児死亡率については年々減少傾向にあるが、少数とはいえ毎年発生している乳児死亡事例のため、イングランド・ウェールズ地域全体の平均は下回ったままである。妊娠中および授乳中の喫煙によって示唆される乳児の健康については、市の保健関係者が期待したほどには改善していない。

喫煙関連の死亡は北西部ならびにイングランドの平均より高く、イングランド第5位である。アルコール関連の疾病による死亡は増加傾向にある。とくに男性の死亡率は全英平均に比べ、きわ

5) ‘Coronation St.’, ITV

(<https://www.itv.com/coronationstreet> 2018年6月1日取得)。

6) この報告書は、2009年の調査のときに助産師ベブからコピーをいただいた。ウェブ上で公開されていると聞いたが、見つけることはできなかった。

だって高い。以上のことをまとめれば、ソルフォードに住む男性はよく飲酒・喫煙をし、病気にかかりやすく、寿命も短い。女性についても妊娠期・授乳期が問題にされ、胎児・乳児への影響の大きさが危惧されている。

### 疾病罹患率

疾病罹患率について、呼吸・循環器系の疾患や糖尿病など、剥奪 (deprivation) 度合いの高さを反映するとされる疾病の罹患率が、全国平均より明らかに高い。

### ライフスタイル

ライフスタイルの指標としては、十代の妊娠、肥満、喫煙率、妊娠中の喫煙、母乳育児の開始、アルコール、セクシュアル・ヘルス、口腔ヘルスなどがある。

まず十代の妊娠について、ソルフォード女性の十代の妊娠率 (女性 1000 人当たりの妊娠数) は、2005 年は 60.6 と前年度に比べ増加傾向にあり、これは政府が定める目標数値を大きく上回っている。18 歳未満の少女の妊娠は、取り組みを始めた 1998 年から 0.5% しか減っておらず、16 歳未満の少女の妊娠についてはむしろ 1998 年に比べ増加している。ちなみに英国自体、ヨーロッパで十代の妊娠がもっとも多く、中絶も多い国のひとつである。

肥満について、ソルフォードに住む成人のじつに 3 人に 1 人以上が、肥満である。2006-7 年度に 81 の学校で測定した結果によれば、子どももまた、おおよそ 6 人に 1 人が肥満である。

喫煙率について、ソルフォードに住む成人の 3 人に 1 人が喫煙者である。より困窮度の高い地域に比べても、喫煙率の高さは際立っている。妊娠中の喫煙について、妊娠中の喫煙率と地域ごとの剥奪度 (5 段階評価) との関連を見てみると、剥奪度のもっとも高い地域 (Q1 地域) に住む母親の 19.9%、剥奪度が 2 番目に高い地域 (Q2 地域) に住む母親の 21.2% が妊娠中も喫煙をつけている。

つづいて母乳育児開始率 (Breastfeeding initiation) について、政府の定める数値目標 (63.2%) に到達するには、さらなる努力が必要と述べられ

ている。2007-9 年のデータでは、Q1 地域に暮らす母親の 61.3%、Q2 地域に暮らす母親の 59.8% が、産後、母乳育児を試みている。前論文において説明したように、母乳育児開始率とは、あくまで産後一回でも母乳を与えることを試みたかどうかを問う指標であり、その後母乳育児が軌道に乗ったかとか、継続して母乳を与えたかどうかは問われていない。別の言い方をすれば、ソルフォードでは、全体の約 4 割の母親が、産後一度も母乳を与えることを試みることなく、人工乳を用いている。なお、同報告書では、次年度より、母乳育児開始率だけでなく、6-8 週時点での母乳育児率についても調査を行うとしている。

そのほか、アルコールについて、「度を越えた飲酒 (binge drinking)」の割合は全英平均よりはるかに高く、北西部ワースト 4 位となっている。さらに、「有害な飲酒 (harmful drinking)」、すなわち一度の飲酒で、一日の推奨摂取量の倍以上のお酒を飲むという行為においても、国全体でワースト 3 位となっている。

また、セクシュアル・ヘルスについて、先に述べた十代の高い妊娠率の問題に加え、梅毒、クラミジア、淋病などに新規に罹患するケースの増加も指摘されているほか、口腔ヘルスについて、5 歳までに子どもの半数以上が虫歯を経験すると指摘されている。

### 保健医療サービスの利用

さいごに、公的に提供されている保健医療サービスへの登録について、成人の肥満や喫煙、高血圧関連の取り組みへの登録を増やすため、さらなる努力が必要とされている。また、子どもの予防接種については、1・2 歳児の接種の数値目標 (95%) をすでに達成している。

以上見てきたように、現代ソルフォードに住むひとびとは、健康やライフスタイル、子育てといった面で、イギリスの他の地域よりも多くの課題を抱えていた。とりわけ妊娠や出産、子育てにおいて、「乳児の健康」という近代的価値との距離の遠さが、特徴的であったと言えるだろう。

### 3 シュア・スタート計画のもとでの新しい授乳支援の取り組み

つづいて本章では、シュア・スタート計画のもとでの、授乳分野の新しい取り組みの概要を確認しておきたい。

イギリスでは、1997年5月に行われた総選挙で、トニー・ブレア率いる労働党政権がマーガレット・サッチャー率いる保守党政権を破り、18年ぶりに政権の座に返り咲いた。当時、ランカスター大学に留学中だったわたしは、学生を含むイギリス国民の熱狂ぶりに驚いたものだ。新政権が政策のトップに掲げたのは、教育、とくに就学前児童の教育改革だった。就学前児童の教育改革は、1998年に財務当局が公表した「8歳以下の児童サービスに関する総合的支出レビュー」に始まる。レビューでは、児童関連の支出が学齢期の子どもに偏っており、関係省庁間の協働に欠けていること、また幼児教育や保育について、地方政府が財源を握り、地域ごとに提供されるサービスにばらつきがあることなどが指摘された。これらの指摘を踏まえ、新たに中央政府の主導のもと、福祉や保健、教育、就労など幅広い関係機関が協働して取り組まれることになったのが、シュア・スタートと呼ばれる10年間の国家計画である。幼児期サービスへの先取りの投資が将来への社会的投資につながるの考え方にもとづき、とりわけ貧困家庭の児童へのサービスに力が入られることとなった(清水2014:82-85)。

シュア・スタートは当初、ファミリー・センターやコミュニティー・センター、図書館、医院など多様な場所で実施されていたが、2006年以降は国内の最貧困地域250ヶ所に「シュアスタート・チルドレンズ・センター」と呼ばれる拠点施設を設置し、行われることとなった(清水2014:86)。貧困地域の選定に当たっては、イギリス全

土を「ベビーカーで通える距離」を基準とする小規模地区(SSLP地区)に分割したうえで、地区ごとの住民の年齢やエスニシティといった人口データ、ひとり親世帯の多さなど家族構造にまつわるデータ、住民の福祉給付依存度や失業の多さといった経済的不利益にまつわるデータ、健康状態にまつわるデータを幅広く収集し、もっとも不利益度の高い地域を選出した(J.ベルスキーとJ.バーンズとE.メルシュ2013:38-39)。なお、2000年代後半にチルドレンズ・センター事業は急速に拡大され、全盛期にはその数は3600ヶ所に及んだ。

具体的に、各地のチルドレンズ・センターでは、国が貧困児童を含むすべての児童の福祉ニーズの充足に必要と定める方針に則り、センターごとに多彩な活動を展開している(清水2014:87)。わたしが2016年3月に訪問したブリストル市のハートクリフ・チルドレンズ・センターでは、センター内に設置された保育所での保育サービスのほか、産前ワークショップ、保健師によるベビー・クリニック、0歳から歩き出すまでの子どものための教室、健康的な食事とライフスタイル教室、チャイルド・マインダーと子どもたちのための教室、父親と子どものための学習教室、英語が母語でない人のための英語教室など、多岐にわたるサービスが提供されていた(村田2018)。

なお、授乳に関する活動としては、上記センターでは、ボランティア団体(ラ・レーチェ・リーグ・インターナショナル<sup>7)</sup>)による母乳育児教室と母乳育児啓発ワークショップが開かれていた(村田2018)。いずれも母乳育児を前提とした支援である。シュア・スタート計画が重視する母子への健康面での支援において、母乳育児は重要な一部と位置づけられている。この時期、若年や低所得の妊産婦への授乳費用の補助制度も見直され、従来の「ミルク・クーポン」制度から、「ヘルシー・スタート(Healthy Start)<sup>8)</sup>」制度へと切り

7) 母乳で育てたい母親を支援する、非営利の団体。活動の担い手は母親たちである。1956年にアメリカのイリノイ州で発足し、現在70ヶ国で活動を行っている。

8) 妊娠中の女性には週に1枚、1歳未満の乳児には週に2枚、1歳から4歳までの幼児には週に1枚、「ヘルシー・スタート・バウチャー」と呼ばれるバウチャーが、4週分まとめて自宅に郵送される。バウチャーの額面は1枚当たり3.10ポンドで、地域の食品店や八百屋、スーパーマーケットなどで、フルーツや野菜、牛乳などの購入に充てることができる。

替わった。もはやかつてのように粉ミルク育児を前提とした支援ではなく、母乳育児を前提とした支援が行われるようになったのである。

#### 4 ソルフォード市チルドレンズ・センター「ブレストメイツ (Breastmates)」の実践から

ここからは、ソルフォード市チルドレンズ・センターにおける母乳育児支援の取り組みである「ブレストメイツ」について、現地調査で得られたデータや知見をもとに、考察していきたい。

##### 4-1 調査の概要

はじめに、調査の概要について説明する。調査は2007年9月から2008年12月にかけての16ヶ月間、参与観察の手法を用いて実施した。調査対象は、サルフォード市に10ヶ所あるシュア・スタート・チルドレンズ・センターのうち、ラクヒル小学校内に建てられたシュア・スタート施設で毎週水曜日に開かれている母乳育児教室、「ブレストメイツ」である。

調査を開始した当時、わたしはマンチェスター市南部のディズベリーという町に、2年間の予定で滞在していた。現地で第二子を出産した直後で、たまたま同じ時期に第一子を出産したAさんと知り合い、Aさんをつうじてブレストメイツの活動を知るようになった。Aさんはソルフォードに在住し、第一子を持ってブレストメイツに通っていた。

初回参加日は2007年9月27日で、以降、隔週ぐらいのペースで参加した。最初の1年あまりは一利用者として参加したのち、教室の責任者である助産師のベブに願い出て、ベブと参加者の聞き取り調査を実施した。許可を得て写真撮影も行った<sup>9)</sup>。また、追加調査として、2011年7月にベブの聞き取り調査を実施した。関連調査として2016年8月と2017年3月にも、マンチェスター市、サルフォード市とブリストル市のチルドレンズ・センターを訪問した。

ディズベリーからソルフォードまでは、バスで

片道1時間半かかる。ディズベリーは典型的なミドルクラスの居住区で、母乳育児開始率は83-85%と、ソルフォードに比べ24%高い(2007年当時、地域の訪問保健師の話)。バスを乗り継ぎ、ソルフォードに近づくにつれ、町の雰囲気が少しずつ変わってくるのに気づく。大型トラックが行き交う産業道路を抜けて、バスが町の中心であるソルフォード・ショッピング・センターに着くと、「タワー」と呼ばれる高層のアパートや、「テラス・ハウス」と呼ばれるセミ・ディタッチト・タイプの住宅が目につく。高層アパートの多くは、1950年ごろから、国の住宅政策により低所



図2 ソルフォード・ショッピング・センターから教室のあるラクヒル小学校へ向かう小道。



図3 ラクヒル小学校近くの道路脇に設置された公衆電話ボックス。ガラスが割れている。奥にはテラス・ハウスが見えている。

9) 参加者の顔が映っている写真は、プライバシーへの配慮から、ぼかしを入れて使用することとする。

得者向けの公営住宅として建てられたもので (Young and Willmot 1957)、近年はより低層の住宅が主流になっている。バス停から教室のあるラクヒル小学校に向かう小道には、ガラスが割れた電話ボックスや、道路わきの鉄柵が大きく曲がったまま放置されている場所があり、少し危ない印象を受ける。

#### 4-2 プレストメイツの活動の概要

つづいて、プレストメイツの責任者である助産師のベバリー・ベレスフォードさん (愛称ベブ) のインタビューをもとに、プレストメイツの活動の概要をまとめておきたい<sup>10)</sup>。

ベブは助産師歴 20 年のベテランの助産師である。以前は病院で働いた経験もある。「母乳育児が大好き」で、助産師としての資格のほかに、国際認定ラクテーション・コンサルタントのほか、母乳育児関連の資格を複数取得している。2002 年にシュア・スタートが始まる以前は、母乳育児支援に対する公的な資金援助は一切なく、ベブは地域でもっとも健康的な方法で母乳育児を支援していた民間の団体で働いていた。シュア・スタートの開始にともない、ベブと訪問保健婦の 2 名がフルタイムのスタッフとして雇われた。ベブは現在、ラクヒル小学校内のプレストメイツの運営のほか、週に 30 時間は母乳育児のための仕事をしている<sup>11)</sup>。

プレストメイツの活動は、2006 年に、市内 10 ヶ所のシュア・スタート・チルドレンズ・センターで一斉に開始した。教室の運営主体はソルフォード市のシュア・スタート・センターである。NHS の「食と健康に関するアクション・プラン」(2005 年) とサルフォード市の「コミュニティー・プラン」(2006-2016 年) にもとづき、関係諸機関との連携のもと、運営している。

活動の目的は、母乳育児や離乳 (weaning)、子育て (parenting) にかかわる支援や指導である。母乳関連の相談として多いのは「乳首の痛み」や

「母乳の分泌不足」で、そのほか「乳腺炎」や「睡眠パターン」、「復職」などの相談もある。

また、プレストメイツの特徴として、ピア・サポートに力が入れている点が挙げられる。教室の名前である「プレストメイツ (Breastmates)」は、敢えて訳出するなら「おっぱい友だち」とでも訳せるだろうか。地域の母親で、教室に通い、一定のトレーニングを受けた母親が「プレストメイト」になり、ピア・サポーターとして活動を行う。プレストメイトたちの役割は、助産師とは異なり、同じ経験をしてきた仲間として、おしゃべりをしたり、励ましたりすることである。

ラクヒル小学校内のシュア・スタート・チル



図 4 助産師のベブ。



図 5 ラクヒル小学校内に建てられた、シュア・スタート施設。

10) ベブには現場で随時わからないことを質問したほか、2011 年 7 月 19 日に、別室にて 2 時間のインタビュー調査を行った。

11) 2011 年以降の新しい取り組みとして、「フィーディング・ワーカー」と呼ばれる専属のスタッフが雇われ、母親とより密に連絡を取る体制が整えられた。加えて、WHO から「ベイビー・フレンドリー」の認証を得るための専属のマネージャーも雇われている。

ドレンズ・センターで開かれるプレストメイツは、ベブともう一人の助産師、保育士、ピア・サポーター、ラ・レーチェ・リーグのボランティアたちによって運営されている。日によってスピーチ・セラピストなど、他の専門職が加わることもある。いずれも女性である。

#### 4-3 公費による活動の利点

すでに述べたように、プレストメイツの活動は、シュア・スタート計画のもと、公費による全面的な補助を得て行われている。公費による補助が受けられることのメリットとして、つぎの5点が指摘できる。

第一に、教室への参加はすべて無料である。

第二に、教室は、地域の母親が子連れで通いやすい場所に建てられた、真新しいシュア・スタートの専用施設で開かれている。

第三に、教室の開催日時は、シュア・スタートが提供する他の人気プログラムとの兼ね合いで、利用者が参加しやすい日時に設定されている。ラクヒル小学校内のプレストメイツの場合、毎週水曜日の午前9時から、母親に人気のベビー・スイミングやベビー・マッサージ（これらもすべて無料である）が開催されており、スイミングでお腹を空かせた子どもに授乳したり、母親自身も休息したりするのにちょうどよい時間帯（水曜日の午前10時半から午後1時ごろまで）に、プレストメイツの時間が設定されている。知人のAさんも、毎回ベビー・スイミングに参加したあと、プレストメイツに足を運んでいた。

第四に、教室では、食事やドリンクが無償で提供される。毎回お昼どきになると、サンドイッチとドリンク（コーヒーまたは紅茶）、サラダ、フルーツ、クッキー、ポテトチップスなどがふるまわれる。サンドイッチは外部の業者にケータリングを委託しているもので、何ら特別な素材を使っているわけではない。なお、授乳中の食べ物については概して自由で、「野菜とフルーツを摂って、バランスよく食べる」ことが推奨されるほかは、1日一杯のワインもむしろ体によいとされている。カフェインについてもうるさく言われることはない。

また、希望すれば、英語の子守歌が録音された



図6 ランチタイムに提供されるサンドイッチを紙皿に取る母親。



図7 子どもの1歳の誕生日に、ケーキを持参した母親と祖母。ケーキは青と緑の鮮やかな原色のクリームで彩られている。

CD がもらえたり、新製品のスリングを試したりすることができる。離乳食の開始時期には、ミキサーなどの育児用品の無償貸与も行っている。

これらはいずれも、その活動が公費によって賄われているからこそ可能になっていることである。加えて、教室では、予約制をとらずドロップ・イン形式にするなど、参加を促すためのさまざまな工夫をしている。

#### 4-4 プレストメイツの活動方針：事前の情報提供と母親の自己決定の尊重

つづいて、プレストメイツの支援方針を確認しておこう。プレストメイツでは、乳児の栄養法・

授乳法について事前に十分な情報提供を行ったうえで、母親自身の選択をサポートするという支援方針がとられている。ソルフォード母乳育児支援チームがシュア・スタート、NHS と共同で作成したリーフレットの表紙には、「あなたの赤ちゃんをどのように授乳しますか？ その選択はあなたのものです」と書かれている。

ただし、母乳と人工乳、どちらを選択してもよいとされているのでは決してない。「あなたは母乳育児をして、同時に人生を楽しむことができます！」というメッセージや、母乳栄養・母乳育児の利点や優位性に関する情報量の圧倒的な多さから、母乳育児がすく推奨されていることは明らかである。

具体的に、リーフレットには、「母乳育児の利点」として、13の利点が挙げられている。すなわち、「1. 赤ちゃんは空腹を満たすと同時に快適さが得られます」、「2. いつだって適温の状態です」、「3. 環境に優しく、いつも新鮮で、決してなくなることはありません」、「4. 多くの感染症に対する免疫抗体が得られます」、「5. 言語やあごの発達によいです」、「6. すべての赤ちゃんにとって、人生の最善のスタートが得られます」、「7. 無料で、いつでもどこでも手に入ります」、「8. あなたと赤ちゃんがやり方さえ覚えれば、簡単で便利です」、「9. 母親には減量と休息を得られる効果があります」、「10. 父親は夜中に起きだして、ミルクを用意する必要がありません」、「11. 知能が高まり、視力の発達にもよいです」、「12. 調合の必要がないから、間違った仕方で作ってしまうこともありません」、「13. 母親は乳がんと子宮がんにかかりにくくなります」。

また、リーフレットでは、母乳で育てられた乳児の健康上の利点について、具体的な数字を挙げながらつぎのように説明されている。「(人工栄養児は母乳栄養児に比べ) 下痢による受診が5倍多い」、「胸部の感染症による受診が2倍多い」、「膀胱や肝臓の感染症に5倍かかりやすい」、「中耳炎に2倍かかりやすい」、「家系的にアレルギーの既

往がある場合、ぜんそくや鼻炎に2倍かかりやすい」、「小児糖尿病にかかりやすい」、「未熟児の場合、稀ではあるが死亡につながるような胃腸の状況に陥る可能性が20倍高い」。さらに、乳児の健康上の利点とあわせて、子宮がんや乳がんの罹患率が下がること、産後の体重減少の助けになることなど、母親にとっての利点も述べられている<sup>12)</sup>。

他方、人工乳については、「考えられ得る利点 (possible advantages)」としてごく控えめに、「1. 母親以外の人でも授乳できる」、「2. 授乳間隔が空く」、「3. 外で授乳がしやすい」の3点が挙げられている。「人工栄養を選択した場合にもサポートが受けられます」と書かれているが、積極的に推奨はされていない。

こうして事前に十分な情報提供を行ったうえで、最終的に母乳を与えるか与えないか、またどれぐらいの期間与えるかなど、決断を下すのは母親である。母乳育児をしないという決断をした母親に対し、叱責や強制がなされることは決してない。ベブの口癖は、「お母さんがハッピーであることが一番大事」であり、つねに母親を励ます姿勢が貫かれている。

なお、母乳の利点や優位性を説くに当たり、このように徹底的に科学の言葉が用いられる理由についてベブに尋ねたところ、イギリスでは産業革命以降、母乳育児に関する文化的伝統が完全に廃れてしまったこと、また多様な文化的社会的背景をもつ母親が集う教室において、特定の文化において推奨されるやり方を「自然」なものとして語るができないことの二点を挙げて説明してくれた。

#### 4-5 プレストメイツの参加者

##### 参加者の中核をなす母親

ここからは、教室の参加者について見ていこう。ラクヒル小学校内で開かれるプレストメイツは、毎回、多くの参加者でにぎわっている。一回の参加者はだいたい25組から30組前後で、ほとんどは母親と子どものペアである。なかには母

12) Salford Royal Hospitals NHS Trust 作成のリーフレット、「How Will You Feed Your Baby? The Choice is Yours」(2005)。

表1 プレストメイツの中核的メンバーの属性

	末子の月齢	本人の年齢(歳)	本人のエスニシティ	本人の出産まへの職業	夫の年齢(歳)	夫のエスニシティ	夫の職業	母乳育児期間
Bさん	18ヶ月	26歳	白人イギリス人	看護師	27歳	アメリカ人	看護師	12ヶ月
Cさん	9ヶ月	38歳	白人イギリス人	大学講師	40歳	白人イギリス人	ナイトクラブ・マネージャー	12ヶ月以上(希望)
Dさん	14ヶ月	26歳	白人イギリス人	教師	31歳	白人イギリス人	測量技師	13ヶ月
Eさん	10週	23歳	白人イギリス人	精神科看護師	34歳	白人イギリス人	精神科看護師	24ヶ月(希望)

親が自身の母親や祖母、友人を伴って参加するケースや、祖母が単独で、孫を連れて参加するケースもあった。父親が子どもを連れて参加していたケースも1例だけが見られた。

以下、主に母親について考察していく。ベブによれば、プレストメイツの活動が主たるターゲットとしているのは、「社会経済的に低い階層の集団の母親」である。ソルフォード市ではとくに、10代の母親への支援に力を入れている。

しかしながら、実際に教室に来ている母親は、やはり母乳育児支援という活動内容のためか、階層が高めの母親が多くなりがちである。ベブによれば、参加者のほとんどが20代半ばからは30代以上の、第一子を養育中の母親である。また近年、シュア・スタート計画の導入により、ソルフォードでは住宅面での補助を含む手厚い公的支援が受けられるようになったことを受けて、周辺より社会経済的不利益度の低い地域から、専門職に就く親たち (young professionals) が流入しているという。そのことも、教室の利用者の社会階層を押し上げるのに一役買っているだろう。

エスニシティの面で言えば、白人イギリス人 (white British) が圧倒的に多い。ソルフォードは歴史的にみて、アイルランド系移民を除き、移民が少ない町で、ベブによれば、移民は人口のわずか3%にとどまるという。教室では、アメリカ人、ドイツ人、ギリシャ人、ポーランド人、中国人、日本人などの母親に出会ったが、割合としては全体の1、2割程度にとどまっていた。インド系、中東系、アフリカ系の母親に出会うことはめったになかった。なお、2008年暮れごろから、中国系の参加者が増えた印象を受けた。

表1は、インタビューに応じてくれた20名ほどの母親のうち、本人と夫の年齢やエスニシテ



図8 Bさん(右)と常連の母親。二人とも第二子を妊娠中で、お腹の大きさを比べ合っている。

イ、職業、子どもの月齢、母乳育児期間などのデータが得られた4名のリストである。いずれも教室の常連で、教室で中核的役割を担う母親たちである。年齢は (Eさんを除き) 20代後半から30代で、出産まえは専門的職種に就く母親が多かった。総じて母乳育児期間が長いことも特徴的である。

### 若い母親

以上見てきたように、教室において中核的役割を果たす母親には、20代後半から30代の、白人でミドルクラスの母親が多かったが、それがすべてではない。プレストメイツには少数ではあるが、若い母親が参加している。

ベブによれば、ソルフォードでは、10代だけでなく、19-21歳の女性が数多く出産している。こうした若い母親の参加が少ないことはベブの悩みの一つであるが、その理由について、ベブはつぎのように説明している。「彼女たちはとてもシャイなのです。自分のことを隠したいのだと思います。あるいは、自分のことをさらけ出すことを

恐れているのでしょう。彼女たちは年上の女性たちよりシャイです。自分が10代のころを想像すると分かりますが、おそらく自分に自信がないのでしょう。

こうした「シャイ」で「自分に自信がな」い母親の参加を促すべく、ソルフォードでは、妊産婦健診や産後の家庭訪問等の機会を利用して、訪問保健師や助産師らによる参加の声かけがなされている。また、近年（2011年当時）始まった新しい取り組みとして、10代の母親の妊娠を支援する専門のサポートワーカーを置き、該当するすべての母親と個別に連絡を取るようになった。また、10代の母親だけを対象にした、グループ・セッションも行っているという。

加えて、ベブは、ピア・サポートも有効である



図9 表1で紹介した常連のEさんも、教室では目立って若い母親の一人である。この日は自身の祖母を連れて参加していた。現在、子どもの父親とは一緒に住んでおらず、実母とその母親、娘と暮らしている。



図10 友だち同士で参加した、若い母親。楽しそうにおしゃべりに興じ、歌を歌っていた。

と考えている。「ここには同じ境遇を経験したサポーターがいます。同じ態度や姿勢で育ってきたね」。ベブによれば、10代の母親にかぎらず、実際に母親たちがプレストメイツに来てしていることの第一位は「社交 (socialize)」あるいは「他の母親や子どもと交流 (communicate) すること」であるという。プレストメイツの本来の目的である「母乳育児支援」はいわば二の次になってしまっているように見えるが、ベブはこのような利用のされ方を肯定的に受け止めている。

### エスニック・マイノリティの母親

つづいて、やはり教室では少数派である、エスニック・マイノリティの出自をもつ参加者について見ていこう。

エスニック・マイノリティであることと母乳育児をすることとのあいだには、少し複雑な関係がある。Infant Feeding Surveyによれば、アジア系やアフリカ系、中国系などエスニック・マイノリティの母親は、白人の母親にくらべ、むしろ母乳を多く与えている (村田2017)。その理由について、ベブは、「文化」という言葉を用いて、つぎのように説明してくれた。「白人の女性に関して言うと、きちんと高等教育を受け、給与がよいとされる職業に就いている人は、母乳育児を行う傾向にあります。しかし、エスニック・マイノリティの母親は別の理由から母乳育児をしようとします。彼女たちの文化においては、母乳育児は文化的によいこととされているのです」。

この意味では、エスニック・マイノリティより白人イギリス人の母親のほうが、母乳育児をするうえで不利な立場に置かれてる。つづけてベブの言葉を引用する。「欧米社会では、母乳育児は文化的にサポートされていません。多くの白人女性が母乳育児を選択しないのは、彼女たちの母親もしてきていないという事実によるものでしょう」。「それに比べ、アジア人などは、母親のそのまた母親のころから、代々母乳育児をしてきています。白人女性にとって母乳育児を選択することは、疎外感を感じることを意味しています。だからわたしたちが、なぜ母乳育児をするのかということ伝えていかなければならないのです」。

ただしまた、エスニック・マイノリティの母親

は、イギリスで母乳育児をする上で、固有の困難も抱えている。それはすなわち、彼女たち自身の文化において推奨される母乳育児のやり方が、ベブらが指導する現代イギリスで主流の母乳育児のやり方と異なることに起因する困難である。たとえば、ベブは母親から母乳の出について相談を受けた際には、母乳の出をよくする効果のある医薬品、もしくはローズヒップやフェヌグreek (fenugreek) などのハーブを用いたティーを勧めるという。しかし、アジア系やアフリカ系の母親の家庭を訪問すると、彼女たちは決まって、それぞれの文化に固有のティーを飲んでいる。そのような場合、ベブは彼女たちのやり方を「絶対的に尊重する」と力を込めて語ってくれた。なぜなら、それらは家庭内で長年用いられてきたものだからである。このように文化的多様性を尊重する態度は、多文化社会イギリス全般に見られるものであるが、とりわけソーシャルワーカーや医療保健専門職など、日常的に文化的背景の異なる人々と接する職業に就く人に広く見受けられる。

しかし、文化固有のやり方が科学的知識にもとづくやり方と鋭く対立するような場合、葛藤が生じる。わかりやすい例として、ベブは、初乳を捨ててしまうムスリムの母親の話をしてくれた。西洋医学的な母乳育児の考え方によれば、分娩後しばらくの期間分泌される母乳（初乳）はその後に分泌される母乳とは組成が異なり、免疫グロブリンをはじめとする免疫成分に富んでおり、何をにおいても与えるべきとされる。ところが、ムスリムの文化では、初乳は汚れた、質の悪い母乳との考えから絞って捨ててしまい、生後1週間が過ぎてから、ようやく母親本人による授乳が開始されるという<sup>13)</sup>。これはベブにとっては、どうしても受け入れることができないことのひとつである。ベブは母親の自宅を訪問し、何とか説得して止めさせようとしたが、母親が英語を話せず、苦勞したと話してくれた。

### 短期母乳育児派の母親

つづいて、これは少数派というよりはイギリスではむしろ多数派であるのだが、短期母乳育児派

の母親について触れておきたい。

図 11 は、教室で哺乳瓶を使って授乳している母親である。話を聞いたところ、「わたしはわたしの赤ちゃんに、8週間、母乳育児をしたわ。その期間の母乳は一番免疫成分に富んでいて、重要な期間だからね」という返事が返ってきた。8週間というと、日本では、「8週間しか与えなかった」もしくは「母乳育児に失敗した」と表現する人が多いように思うが、彼女が堂々と、「8週間、母乳育児をした」と言い切ったことにわたしは軽い衝撃を受けた。なお、彼女は友だちに会うため、またピア・サポーターになるため、現在もプレストメイツに来つづけているとのことだった。

このように短期で母乳育児を切り上げる母親について、ベブは「残念だが仕方がない」と捉えている。本音を言えば、ユニセフの方針に沿って生後6ヶ月まで、できれば12ヶ月まで母乳で育てることが望ましいとベブ自身は考えているが、現状においてソルフォードでは、約半数の母親が、生後6週間から8週間のあいだに母乳育児をやめてしまう。したがって、半年や1年といった目標掲げること、現実的ではないとのことだった。先に紹介したプレストメイツのリーフレットにも、「たとえあなたが母乳育児をするのはごく短期間にしようと思ったとしても、あなたは子どもに、人生の最善の始まりをプレゼントしているのです」、「ともかくやってみてください。あなたにとって失うものはないし、あなたの赤ちゃんにとっては得るものばかりなのです。たとえ2、3



図 11 8週間、母乳育児をしたと答える母親。

13) 日本でもかつて、初乳を捨てる習慣があった（大藤 1968）。

日でいいので、やってみてください」と、短期母乳育児の決断を肯定するメッセージが書かれている。

このように、短期母乳育児を含め、肯定的にサポートしていくことで、参加しやすい雰囲気が作られていることは確かである。

### 母乳育児に関心がない参加者

さいごに、14ヶ月になる孫娘を連れて参加していた、中国出身のFさんの話をしておきたい。Fさんは54歳の女性で、本国では会社を営んでいる。イギリスで暮らす一人娘の子育てをサポートするため、夫を中国に残し、単身渡英してきた。Fさんの娘はイギリスの大学を卒業後、衛生局で働いている。娘の夫はドイツ出身のムスリムの男性で、ITの資格を取るため学校に通っている。

娘が産後8ヶ月で復職してからは、平日の昼間、Fさんは一人で孫の面倒をみている。プレストメイツへは、助産師に紹介されて参加するようになった。ただ、母乳育児については、Fさん曰く「全然関心がない」。孫についても、「この子、おっばい、大嫌い。いつも瓶のミルクを飲むだけ。9ヶ月になるまえ、ママのおっばいが出なくなってやめました。この子、怠け者です。ママのおっばいは力があるから。瓶のミルクは、いらぬ」と言って笑った。

ではFさんは何のためにここに来るのですかと尋ねると、Fさんは、「子どものため」と即答した。「子どもは社会と接触しなければならない。毎日わたしと一緒にでは寂しいです。言葉も練習できます」。Fさん自身は英語がほとんど話せないため<sup>14)</sup>、普段はチャイナタウンとスーパーマーケットに出かけるほかは、ほとんど外出することがないといい、そうした生活は孫にもストレスを与えていると考えている。「毎日家で、わたしと二人、窓から見ただけ。いつも自分の頭を叩きます。ここに来たら叩かないです。子どもにとってもいいです」。「この子、ここに来るのが好き。この子の名前、この人、みんな知っています」。



図12 Fさんと孫。

加えて、Fさんは、教室に来ることが、自分自身にとってもプラスになると考えている。「わたしに対して、イギリスの社会は関連がないけれども、ここへ来て、イギリス人の考え方とか生活のこと、習っています。母乳にかぎらずです。イギリスの子と遊びながら、言葉を聞き取れるようになって、わたしにとって、いい勉強になります」。

このように、個々の利用者によって、サービスが本来意図されたのではない目的のために使われていることは、サービスの失敗というよりは、成功とみるべきだろう。サービス本来の目的とは言うまでもなく母乳育児を推進することであるが、Fさんは一方で、孤立した環境での子育てが子どもに与えるストレスへの対処のため、また他方で、この国で移民の子どもとして生まれた孫の将来にとって不可欠な英語の習得のために、サービスとのずれを自覚しつつ、教室に来つづけていたのである。

## 5 おわりに

以上、イギリスソルフォード市ラクヒル小学校内のシュア・スタート施設における、母乳育児支援教室「プレストメイツ」の実践について詳しく紹介してきた。稿を閉じるに当たり、冒頭で述べた二つの問い——母乳育児支援と社会階層のかわり、ならびにフェミニズムと科学のかわり

14) 幸いなことにFさんは日本語が堪能であったので、インタビューは日本語で実施した。

——に立ち返り、いま一度、その実践の今日的意義について考察しておきたい。

第一に、母乳育児支援と社会階層のかかわりについて、プレストメイツでは、元来ミドルクラスの専有物となりがちな母乳育児支援を、広く社会経済的に不利な集団にアクセス可能にするためのさまざまな工夫がなされていた。シェア・スタートの施設自体が多層的不利益の集中する地域に建てられ、住民全員を対象にサービスを提供しているため、貧困層向けのサービスにつきもののステイグマを回避することが可能になっていた。また、公費による補助のお陰で、立地もよく、明るく新しい施設で、無償でのサービス提供が可能になっていた。

実際の教室の参加者には、ミドルクラスの、20代後半から30代以上の母親が多かったが、なかには少数ではあるが、10代の母親やエスニック・マイノリティの母親も参加していた。自分に自信がなく、参加をためらいがちという10代の母親には、「同じ態度や姿勢」を共有するピア・サポーターによる支援が有効であっただろう。また、エスニック・マイノリティの母親には、文化固有のやり方を最大限尊重する姿勢が貫かれていた。

第二に、フェミニズムと科学のかかわりについて、プレストメイツでも日本同様、あるいは日本以上に、科学の言語を用いて「母乳の比類なき優位性」を前提とする支援が行われていた。その意味で、フェミニズムが一貫して取り組んできた、女性というカテゴリーとケア労働のあいだに構築された強固なつながりを解体するという目標に、ダイレクトに寄与するものでなかったかもしれない。

ただしまた、プレストメイツでは、母乳で育てることのハードルが思い切り低く設定されていた。食事については「野菜とフルーツを摂って、バランスよく」食べてさえいれば、うるさいことは言われぬ。アルコールもワイン一杯であれば、むしろ健康にいいと言ってもらえる。また、母乳を与える期間について、たとえどんなに短期間でも、母乳を与えようところみていればそれを母乳育児とみなし、認めてくれる雰囲気がある。その意味で、プレストメイツの実践は、「母乳が最

善」という主張をいったんは受け入れたうえで、女性にとってより抑圧的ではない母乳育児のあり方を模索する、フェミニズム的な実践であったと言えるだろう。

ひるがえって、日本では、現状において母乳育児支援に対する公的な補助がないため、出産した病院でたまたま無償の母乳相談が受けられるといったケースを除いては、自力でサービスを探し出して購入するほかない。日本全国に330ヶ所の相談室をもつある法人の場合、助産師による乳房マッサージと母乳相談に、初回5000円、2回目以降は3500円の料金が課される。いったいどれだけの家庭が、長期にわたりこの料金を負担しつづけることができるだろうか。

ひとつの解決策は、政府に対し、助産師らによる母乳育児支援に公的な補助を出すよう、要求していくことである。ただしその際、個々の助産師が有する高度な手技や専門的知識だけを主要な要件とするのではなく、誰もが参加できることこそが要件とされるべきではないか。プレストメイツでは、短期母乳育児派の母親も、食に関心のない利用者も、また母親に代わって母乳以外の方法で子どもを育てる養育者も排除されていなかった。移民で英語が話せないFさんでなくとも、育児負担度が大きい乳児期の子育てにおいて、さまざまな事情から困難を経験することは誰にでもあり得る。そうした困難のただなかにある人を孤立させないためにも、母乳育児をある意味「口実」にして、多くの人が気軽に集うことのできる場を作っていくことはできないだろうか。

なお、ラクヒル小学校内のシェア・スタート・チルドレンズ・センターは、2016年8月に訪問した際、すでに閉鎖されてしまっていた。2011年以降の予算削減の余波を受けてのことと推測されるが、プレストメイツの実践自体は、市内の他のチルドレン・センターで現在もつづいている。

最後に、調査に協力してくれたベブとプレストメイツのみなさんに、この場を借りて感謝の意を表したい。

#### 引用・参考文献

- J. ベルスキーと J. バーンズと E. メルシュ著、清水隆則監訳 (2013) 『英国の貧困児童家庭の福祉政策

- “Sure Start”の実践と評価』明石書店。
- F. エンゲルス著、浜林正夫訳（2000）『イギリスにおける労働者階級の状態（上）』新日本出版社。
- H. ヒラータと F. ラボリと E. ル＝ドアレと D. スノティエ編、志賀亮一・杉村和子監訳（2002）『読む事典 女性学』藤原書店。
- 村田泰子・伏見裕子（2016）「明治期から昭和初期における小児科医の母乳への関心—『児科雑誌』の分析から—」『関西学院大学社会学部紀要』124号。
- 村田泰子（2017）「家族政策と社会階層（前編）—イギリス Infant Feeding Survey に見る、授乳期家族に関する知識とその活用—」『関西学院大学社会学部紀要』126号。
- 村田泰子（2018）「イギリス：『ニーズを抱えた子どもと家族』への支援と公的保育所の役割」、RISTEX「養育者支援によって子どもの虐待を低減するシステムの構築」公開シンポジウム「ユニバーサルで切れ目のない養育者支援によるリスク予防—産前・産後ケアから保育の無償化まで—」、2018年3月20日、京都大学。
- 大藤ゆき（1968）『児やらい』岩崎美術社。
- 清水隆則（2014）「英国の地域貧困児童家庭支援政策（シュアスタート）の示唆するもの—児童の発達・生活支援と地方自治体—」『都市とガバナンス』Vol.21。
- 所道彦（2012）『福祉国家と家族政策 イギリスの子育て支援策の展開』法律出版社。
- Glencross E., 1983, *Memories of a Salford Childhood 1914-1928, Breakfast at Windsor.*
- Jones S., 1997, *Manchester...The Sinister Side, A Wicked Publication.*
- Koichi Negayama, Hiroko Norimatsu, Marguerite Barratt and Jean François Bouville 2012 ‘Japan-France-US comparison of infant weaning from mother’s viewpoint’, *Journal of Reproductive and Infant Psychology* Vol.30. No.1, 77-91.
- Wolf B. J. 2013, *Is Breast Best?: Taking on the Breast-feeding Experts and the New High Stakes of Motherhood, Biopolitics.*
- Young and Willmot, 1957, *Family and Kinship in East London*, Penguin Books.

## Family Policy and Social Class, Part 2: The Possibilities of Alternative Breastfeeding Support Practices: 'Breastmates' in Salford, England

### ABSTRACT

This paper examines the ways in which breastfeeding support was provided in Salford, one of England's most economically deprived areas since industrialization. It is a well-known fact among health professionals in England that women from deprived areas are less likely to breastfeed their babies especially when they are a teenage mother.

It was in 2006 that a new breastfeeding support class called 'Breastmates' launched its service in Salford under the Sure Start Local Programme. While their aim was to provide information and support for mothers from disadvantaged social groups, especially teenage mothers, it is more likely that first-time mothers in their 20s and 30s will attend. They are quite often women with higher academic backgrounds and work experience in professional jobs.

In the class, there were also small numbers of minority mothers who truly need support, such as young mothers, mothers with ethnic minority backgrounds and the like. Also, there are mothers who quit breastfeeding very early (normally at 6-8 weeks after birth). Some of them are not even interested in breastfeeding at all but come to the class to socialize with people or learn the English language. It was this inclusiveness that makes this practice attractive.

**Key Words:** social class, feminism, breastfeeding support